

中学校

平成 7 年 度

# 教育研究員研究報告書

道 徳

東京都教育委員会

平成7年度

教育研究員名簿(道徳)

分科 会名	区市町 村名	学 校 名	氏 名
第 一 分 科 会	港	芝 浜 中 学 校	立 岩 達 男
	墨 田	豎 川 中 学 校	◎梅 原 滋
	目 黒	第 七 中 学 校	堀 利 光
	世 田 谷	砧 中 学 校	飯 塚 直 也
	杉 並	井 草 中 学 校	○三 ツ 木 一 重
	八 王 子	陵 南 中 学 校	金 子 真 吾
第 二 分 科 会	立 川	立 川 第 四 中 学 校	久 保 政 幸
	大 田	羽 田 中 学 校	岡 本 宏 春
	北	新 町 中 学 校	富 張 雄 彦
	練 馬	豊 玉 中 学 校	○勝 山 文 也
	足 立	花 保 中 学 校	中 村 孝
	葛 飾	高 砂 中 学 校	大 内 弘 全
	府 中	府 中 第 十 中 学 校	川 崎 達 也
	日 野	日 野 第 四 中 学 校	石 川 晴 一
保 谷	ひ ば り が 丘 中 学 校	小 澤 雅 人	

◎ 世話人      ○ 副世話人

担当      教育庁指導部主任指導主事      富 山 謙 一

— 研 究 主 題 —

人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道德の時間の指導

目 次

I	研究主題設定の理由	2
II	内容項目2—(3)「友情・信頼」についての指導（第1分科会）	3
1	主題設定の理由	3
2	研究の内容と方法	4
(1)	内容項目2—(3)のとらえ方	4
(2)	生徒の実態と各学年のねらい	5
(3)	授業改善の視点	7
(4)	実践事例	9
3	まとめ	12
III	内容項目1—(4)「真理の愛・理想の実現」についての指導（第2分科会）	14
1	主題設定の理由	14
2	研究の内容と方法	14
(1)	内容項目1—(4)のとらえ方	14
(2)	生徒の実態調査	15
(3)	授業改善の視点	17
(4)	実践事例	19
3	まとめ	23
IV	まとめと今後の課題	24

## 研究主題

人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道德の時間の指導

### I 研究主題設定の理由

日本の戦後50年は平和と繁栄の時代であったといえる。経済のめざましい発展や科学技術の進歩は、人々に物質的な豊かさをもたらした。しかし、人々に物質優先的な考えを吹き込み心の豊かさをなおざりにする傾向を引き起こした。さらに、少ない子供たちを大切に育てようとする少子化の傾向は、物の豊かさとあいまって子供の自己抑制力や耐性を弱めている。

現代社会は、情報化、国際化、高齢化など多様で複雑な要素を生み出した。社会構造は変化し、人々の生活を一変させた。人々は多様な価値観をもち、様々な生き方をすることができるようになった。

子供を取り巻く環境も複雑化し、人間関係の在り方を学ぶ機会も減少した。そして、人間関係が希薄化すると、人と人との関わりの未熟さや孤独化の傾向を示すようになった。登校拒否やいじめなど子供の人格形成に関わる問題なども、より顕著に現れるようになった。さらに、価値観の多様化は価値観の混乱をまねき、自己中心的な価値観に陥る子供や勤労意欲の乏しい子供、さらに将来への夢や希望をいだけない子供が生まれてきた。

このような状況の中にあって学校教育においては、今までの知育に偏重した教育の在り方が見直され、知育・徳育・体育の調和のとれた教育の実現がより一層求められている。特に道德教育を中心に心の教育の重要性が叫ばれている。

中学生の時期には一般に自らの人生についての関心が高くなり、自分の人生をより良く生きたいという内からの願いが強くなる。しかし、生徒を取り巻く現状はこの願いが素直に実現される状況には必ずしもない。教師はこの願いに目を向け、生徒が自分自身をよく知り、自分の良さを確認し自己理解を深めるとともに、意欲的にたくましく生きようとする態度を育成できるように支援しなければならない。

また、他者との望ましい関係を築こうとする意識を高め、自己の価値観を築きあげ、自分を見失わないたくましさや他者の価値観を認める広い豊かな心の育成に努めなければならない。

上記の課題にこたえるために、研究主題を「人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道德の時間の指導」と設定した。そして第1分科会は主として他の人との関わりに関する事で人間としての生き方を考えることに視点を置いた内容項目2-(3)「友情・信頼」を、第2分科会では主として自分自身に関する事で、人間としての生き方を考えることに視点を置いた内容項目1-(4)「真理愛・理想の実現」をそれぞれ取り上げた。

各分科会では、内容項目のとらえ方の検討、アンケートなどによる生徒の実態把握、指導資料の収集と分析、指導過程や指導方法の検討等を研究授業における生徒の反応や評価資料をもとに検証しながら研究・協議し、生徒の心に響く道德の時間の指導の在り方を求めて授業の改善・工夫をすることによって、研究主題に迫ろうと考えた。

## Ⅱ 内容項目 2-③「友情・信頼」についての指導（第1分科会）

### 1 主題設定の理由

経済のめざましい発展や科学技術の進歩は、人々に物質的な豊かさをもたらした。また、情報化、国際化、少子化などをはじめとする社会構造の変化は、人々に多様な価値観を生み出すことになった。これらの社会変化は生徒の心身の成長や発達にも様々な影響を及ぼしている。例えば、核家族化により、年上の人から生活の知恵や習慣を学ぶ機会が少なくなったり、一人っ子家庭の増加によって、家庭内において何かを我慢したり譲り合う必要がなくなった。また、塾や習い事へ通う生徒が増え、放課後の生徒同士の自由な時間や触れ合いが少なくなったことなどがあげられる。このように、現在の子供たちを取り巻く社会環境は人間関係の在り方を学ぶ機会をますます減らしている。そして、この人間関係の希薄さや未熟さが、自分と違った行動や考え方をする人への理解を妨げ、ひいては、いじめという他者への理解や共感することなどに欠ける行為を生み出していると思われる。

また、人間の成長段階から見ても、小学生の頃の友人は、自我がまだ十分には芽生えていないために仲良しの遊び友達にとどまっているが、自我に目ざめ、自我を確立する青年前期にある中学生の時期は、互いに心を許し合える友人を真剣に求めるようになる。また、世代の開きによるものの見方や考え方など価値観の違いを強く意識し始める時期でもあり、なおさら同世代に良き理解者を求めたり、心の底から打ち明けて話せる友人を得たいと願う気持ちが強まる時期でもある。

一方、この時期は互いに心を許し合える友人を強く求めようとする反面、発達段階から友人を理解しきれなかったり、単なる気が合う存在としてしかとらえられなかったりして、広くその意義や人間関係の在り方を深められないこともある。感情の起伏が激しく、ささいなことから感情の行き違いが生じ、せつかくの友人関係を台なしにしてしまったりすることもある。また、友人を失いたくない、友人から嫌われたくないと思うあまり、友人の言いなりになって望ましくない関係に甘んじていたり、好ましくない方向に陥ったりすることもある。

生徒を取り巻く社会的な背景や、中学生の発達段階を考えたとき、真の友情や友情の尊さについて理解を深めることは大切であり、自己を見つめ、自分を向上させる努力をして、友情を一層確かなものにすることは、これからの生き方に大きな自信をもたせると同時に、人間としての幅を広げ深める大きな力になると考える。

「友情」とは、互いに相手を大切に思う心であり、その心は純粹であっていつわりや見せかけがないことである。そのためには人間的な成長を願って互いに言いにくいことも言い合える間柄でなければならない。そうすることによって、はじめて「友の憂いにわれは泣き、わが喜びに友は舞う」ことができるのである。

以上のことから、第1分科会では、「人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導」として、内容項目 2-③「友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うようにする。」を取り上げ、内容項目のとらえ方、生徒の実態把握、資料の収集・検討、指導方法や指導過程等の工夫について研究を進めることにした。

## 2 研究の内容と方法

### (1) 内容項目2—(3)のとらえ方

内容項目2—(3)は、「友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うようにする。」(中学校学習指導要領 道徳)である。

中学生の時期は、自我に目覚めそれを確立する時期であり、それまで心を託していた親や教師よりも、同世代に心のよりどころを求めるようになる。つまり他には言えないことでも、無防備に心の底から打ち明けられる友を得たいと願うようになるのである。

このように、互いの心を打ち明けられる友達であるためには、相互に信頼し合えることが大切であり、また、その基盤には相互に敬愛し合う気持ちがなければならない。それにはまず、相手の内面的な良さに目を向けようとするところから始まり、次第に他を愛し敬う気持ちが芽生え、それがやがては相手を深奥から信頼することにつながっていくのである。

ところが、ともすると友達というものは自分のためだけにあるといった自己中心のわがまま勝手な考えや行動にも走りがちになる。これでは、相互に信頼し合える関係など成り立つはずもない。

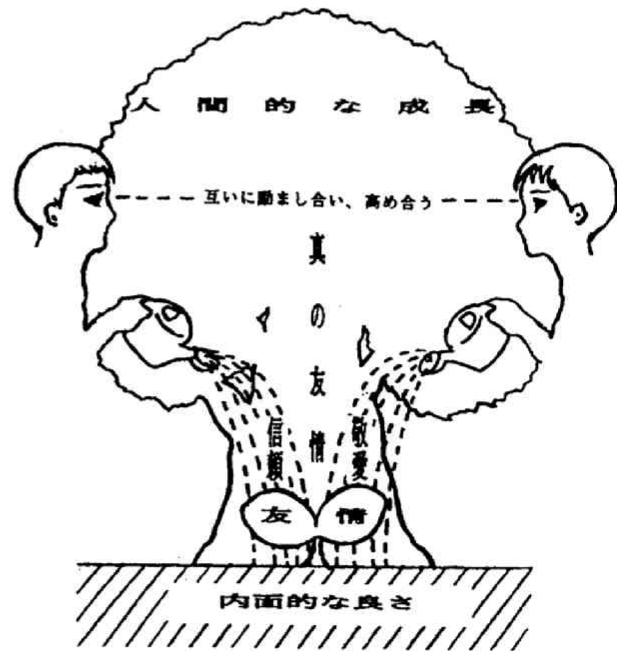
そこで、望ましい友達関係を築くためには、まず自らが相手から敬愛される存在でなくてはならない。したがって、友情に関する指導では、自己の内面に目を向けさせ、自分を向上させていくことが他からの敬愛に値するという点を自覚させる必要があると考える。

さらに、一層確かな友情のきずなとは、単に助け合い励まし合う関係にとどまらず、相手の向上を心から願っては時として言いにくいことも忠告し合い、人間として高め合っていくところにもある。友達関係とは、そこまで互いに昇華し合えてこそ、真の友情と言えるのではなかろうか。

さて、この内容を木に見立ててみると、まず、互いの内面的な良さを土壌として、そこから友情が発芽する。そして、この芽に信頼と敬愛という養分をお互い大切に注いでいくと、次第に真の友情という、太くたくましい幹となり、やがて青々とした葉の広がりを見せるまでに成長していくものと例えることができよう。

友情の形成は生涯にわたって続いていくものであるが、特に青年前期の段階にある中学生にとっては、人間的な成長と密接な関わりをもち、生徒の将来にまで大きな影響を及ぼすと言っても過言ではあるまい。

以上述べてきたことを構造図に表すと図1のようになる。



〔図1〕友情・信頼のとらえ

(2) 生徒の実態の把握と各学年のねらい

内容項目 2-(3)「友情・信頼」について指導を効果的に行うために、中学生における友人関係や友情に対する考え方などの実態を把握するためにアンケートによる調査を実施した。

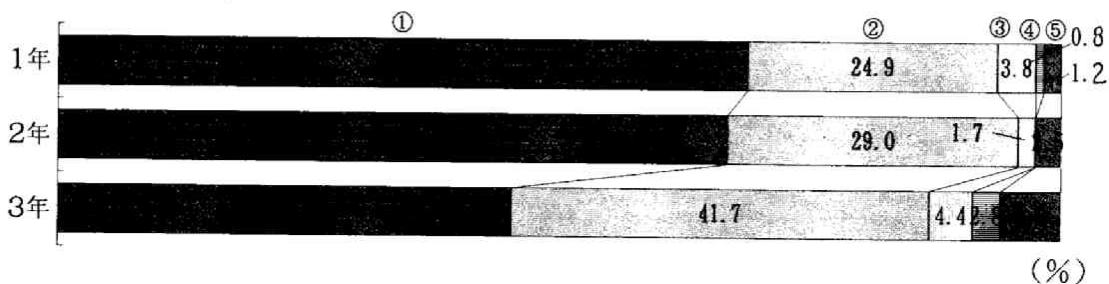
ア 調査期間 平成7年7月上旬

イ 調査地域 港、墨田、目黒、世田谷、杉並、八王子、立川

ウ 調査人数 1年生244名、2年生239名、3年生260名

設問(1) 「現在、あなたには友達がいますか。」

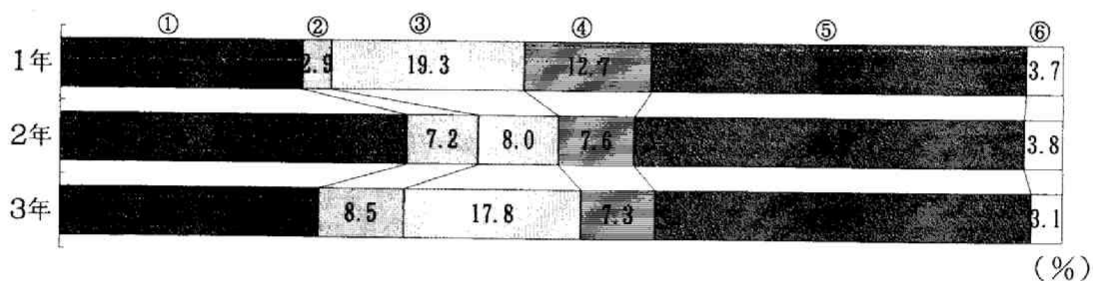
- ① たくさんいる。
- ② いる。
- ③ 少しいる。
- ④ ほとんどいない。
- ⑤ わからない。



この調査では生徒が自分の友人の数をどう考えているかを調査した。①と答えた生徒がどの学年においても最も多い。しかし学年が上がるにつれて減少傾向がみられ3年生では半数を割っている。

設問(2) 「あなたの友達はどのような友達ですか。」

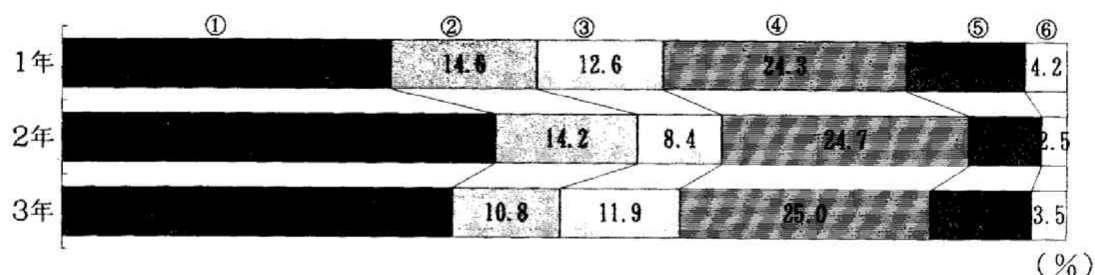
- ① 趣味や話題など話が合う。
- ② 何となくいつも一緒にいる。
- ③ 信頼していて、何でも相談できる。
- ④ 自分が困ったときに助けてくれる。
- ⑤ 一緒にいると楽しい。
- ⑥ その他



この調査では生徒の友人像について調査した。どの学年でも①、⑤と答えた生徒が多く、学年による差もそれほどない。

設問(3) 「あなたにとって望ましい友達とは、どういう友達ですか。」

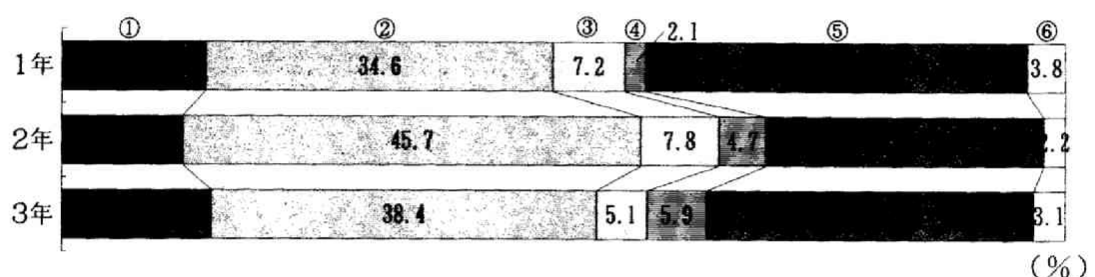
- ① 一緒にいて楽しい。
- ② 趣味や話題などがあう。
- ③ 人間として尊敬できる。
- ④ 自分を裏切るところがない。
- ⑤ 自分の悪いところを言ってくれる。
- ⑥ その他



この調査では生徒が友人に求めるものを調査した。①の「一緒にいて楽しい」が、設問(2)同様、どの学年とも最も多い。しかし①と②を合わせた割合は、設問(2)の①、⑤を合わせた割合よりも少なく、④がどの学年とも約25パーセントの割合を占めている。

設問(4) 「『親友』と『友達』に違いがあるとすれば、どういう点ですか。」

- ① 「親友」も「友達」もとくに変わりはない。
- ② 何でも話せるのが「親友」、話せないこともあるのが「友達」。
- ③ 長くつきあっているのが「親友」、つきあいの短いのが「友達」。
- ④ 一緒にいて安心できるのが「親友」、落ちつけないのが「友達」。
- ⑤ 信頼し尊敬できるのが「親友」、一緒にいて楽しいのが「友達」。
- ⑥ その他



この調査では「親友」と「友人」との違いをどう考えているかを調査した。第1学年で、最も多かった答は⑤であった。第2、3学年で多かった②の答も友人に対する信頼感を表していると考えられるので、深い信頼関係にある友人を「親友像」と考えているといえる。

以上のことから、現在の中学生は友達が多いものの、その関係は親友と呼べる関係を模索している発達の過程にいと考える。そのため、まだ、いわゆる「仲良し」的な関係にとどまっている者が多いと考えられる。このことは私たち教師が日常の生徒観察の中で感じて



いる「生徒同士の人間関係の希薄さや未熟さ」と一致するところである。

しかし、学年が上がるにつれて比較的關係が希薄な友人を「友達」として考えることが減り、もっと深い友達関係を求める気持ちが、発達段階とともに強まっていくといえる。

以上のような実態把握に基づき、各学年の指導のねらいを次のように設定した。

第1学年 友情の大切さを理解し、相手の立場を考えながら協力し助け合っていこうとする意欲と態度を養う。

第2学年 自己の内面に目を向け、お互いに励まし合い高め合いながら友情を育てていこうとする意欲と態度を養う。

第3学年 相互の信頼と敬愛の念の土台の上に真の友情があることを理解し、真の友情を育てていこうとする意欲と態度を養う。

### (3) 授業改善の視点

#### ① 資料選定の観点・内容

第1分科会では、内容項目2-③「友情・信頼」の指導に供する資料を中学校指導書道徳編（平成元年3月 文部省）に示された内容を踏まえるとともに、次の諸点に留意しつつ選定した。

(ア) 生徒の実態にそくしたもの。

(イ) 生徒の日常的な体験に近いもの。

(ウ) 生徒が理解しやすいもの。

(エ) 生徒が、ねらいとする価値を自覚し、実践しようとする意欲を育てられる内容のもの。

以上の観点にたって資料を収集し、検討した結果、文部省道徳教育推進指導資料（指導の手引き）2所収の「いつも一緒に」を選定した。

#### ② 授業の構想

内容項目2-③は、「主として他の人とのかかわりに関すること」の中に示されている項目である。人間がより良く生きていく上で他の人との関わりを考えたときに、人は社会に出る一歩として、「礼儀」「思いやり」「友情」「敬愛」について深く考え、身に付けていかなければならない。

中学生にとって他の人との関わりで一番身近で、しかも精神的にも大きな関わりをもっているものが友達である。しかし、その関係は「一緒にいて楽しい」とか、「趣味が合う」など、実態調査の結果からも分かるように、生徒は単なる仲間的で希薄な人間関係からより深い人間関係を築いていく成長や発達の途上にいる。

そこで、より良い友人関係を築くにはどうしたら良いかということを考えさせるために、まず、自他の内面に目を向けさせる必要がある。そして、「友情」には信頼・敬愛し合い、互いに人間として高め合っていくことが大切であることを生徒自らが感じとり、友情を育てていこうとする態度を育てるような授業を展開していくことが重要であると考えた。

### ③ 指導方法と指導の工夫

授業を構想していく過程で、まず生徒の「友達」に関する意識と実態を把握する必要があると考えアンケートを行うことにした。それは生徒にねらいとする価値を自覚させるための効果的な指導方法や発問を工夫する場合の手立てとなると考えたからである。また、選定した資料は、主人公の心の弱さや迷い、友達の悩み沈んだ様子、そして、もう一度やり直そうと決心する部分の描写は、非常に細かく描かれており、生徒の心を打つものがある。そして、生徒は資料に自分の心を映しながら「友情は大切なんだな。」「友情は、お互いに育てていかなければいけないものなんだな。」と思い、自分の友達関係を振り返り、そして本時のねらいである、「心から信頼できる友達をもつことの大切さを理解し、友情を育てていこうとする態度を養う」ことができると考えた。そのためには、単に資料の内容を理解させるだけでなく、生徒の実態をもとに、ねらいを明確にしながら、自己の内にある人間の心の弱さや気高さに気付くとともに、「より良く生きたい」という本質的な願いに訴えることができるよう発問を工夫した。

また、自分の考えを表明するとともに、様々な考えも聴き合うことによって、より高い価値観に高めることができるのではないかと考え、小集団による話し合いの形態を一部取り入れることにした。

#### (ア) 導入

資料名でもあり、資料中にも出てくる「いつも一緒に」から連想するイメージを生徒に問いかけ、主題に対し興味・関心をもたせるとともに、価値への導入を促した。

#### (イ) 展開

資料を4つの場面に構成し、4枚の資料として生徒に提示し、1枚ずつの止め読みにした。そして、場面をより理解させるために情景を一枚絵に書き、提示した。また、発問はそれぞれの場面での登場人物の行動を問うものに絞り、行動の裏にある心情を感じ取らせる工夫をした。

また、一人一人の生徒が自分なりの感じ方や考え方をもち、表現するとともに、互いに感じ方や考え方の異同に気付き、交流が深められるよう工夫した。そのため、グループにおける小集団での話し合いをさせ、そこで出てきた意見を参考にしながら、自分の考えを深めるという授業形態をとった。

#### (ウ) 終末

事前に行った「友達」についてのアンケートの結果をもとに、友情についてのクラス全体の意識の特徴を述べ、また、教師自身の生き様に基づき「友情」を深めてきた体験に照らし何が大切なのかという説話をしてまとめた。

### ④ 評価の工夫

- 生徒が発言などを通して、意欲的に授業に参加していたか。
- 道徳ノート等により、自分の考えをまとめることができたか。
- 資料中の登場人物、または友達の考え方と自分の考え方を比較していたか。
- 日常生活における、友情の在り方がいっそう深まったか。

以上の観点を、発言内容、話し合いでの様子、道徳ノートの内容、授業後の日常生活に

おける態度の観察から評価する。

⑤ 資料の内容

この資料は、小さな嫉妬から友達との信頼関係を壊してしまった主人公が、「親友」の意味に付いて自分なりに考えながら、友情の大切さに思いいたるまでの主人公の心の動きを追ったものである。

真理子は、仲よしだったみゆきがバレー部のレギュラーになったことから、以前のように素直にふるまえなくなる。同級生の恵子や由里の誘いによって、みゆきを無視し始め、みゆきはクラスの他の仲間からも孤立してしまう。そんな真理子に対してみゆきは真剣に自分の心を訴えるが、真理子はその訴えにも心を閉ざす。しかし、恵子の友人評を聞いた真理子は、自分にとって本当の友達とは何かを考え、もう一度みゆきとやり直したいと決意する。

(4) 実践事例（第2学年）

① 主題名 「友情」（内容項目2-3）

② 資料名 「いつも一緒に」文部省「道徳教育推進指導資料（指導の手引き）2

③ 主題設定の理由

日常の友人関係が、ちょっとした言葉の行き違いで気まずい思いをすることは、よくありがちなことである。特に、中学生期の生徒たちにとって、友人との生活が占める割合も多くなり、様々問題を抱えている。友情を育てていく事を真剣に考えることで、日常生活を見直す機会としたい。

④ ねらい

心から信頼できる友達をもつことの大切さを理解し、友情を育てていこうとする実践的意欲と態度を養う。

⑤ 指導過程

	学習活動・発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導 入	1 いつも一緒にから連想するイメージを発表する。	○ 友達、家族、部活動など日常生活の様々な場面それぞれに「一緒に」という言葉のイメージをもつ。	○ 「いつも一緒に」ということに関心をもたせる。
	2 「いつも一緒に」を4つの場面に分けて読む。 (1) 資料1枚目を読む。 ① 「自分が真理子、みゆきだったらこれからどのように行動するか」 グループの中で各自の意見を交換し、自分の考	○ みゆきが謝るまで待つ。 ○ 言い過ぎてごめんと謝る。 ○ 恵子たちを友達にする。 ○ 宿題を頼み勝手だったことを謝る。	○ 資料は1枚ずつ教師が範読し、生徒は黙読する。 ○ その時自分ならどうするかを考えさせ、人には長所、短所が必ずあることを知らせる。

展 開	<p>えや気持ちを発表する。</p> <p>(2) 資料2枚目を読む。</p> <p>② 「真理子は、みゆきを見無視する。どうしてこんな行動をとったのか」意見の交換をし、発表する。</p> <p>(3) 資料3枚目を読む。</p> <p>③ 「どうしてみゆきは、真理子に対してありのままの気持ちをいおうとしたのか。」</p> <p>補助発問 「無視されて一週間、みゆきの心に真理子のことは考えにあったのだろうか」</p> <p>(4) 資料4枚目を読む。</p> <p>④ 「真理子とみゆき、恵子と由里の関係は、これからどのように発展するのか。」</p>	<p>○ 恵子たちに乗せられてしまった。</p> <p>○ みゆきを妬む気持ちがあった。</p> <p>○ おもしろいと思ったから。</p> <p>○ 真理子のやり方に納得がなかった。</p> <p>○ 真理子のことを信じていたから。</p> <p>○ みゆきは思い悩みその気持ちをどうしても真理子に伝えなかった。</p> <p>○ 真理子とみゆきは、前より仲良くなる。</p> <p>○ みゆきが真理子を許せず他の友達をつくる。</p> <p>○ 恵子と由里は、ささいなことでケンカになる。</p> <p>○ お互いの陰口を言い合う</p> <p>○ 表面的には一緒にいる。</p>	<p>○ 友達を見無視するという行為が、どれだけ心を傷つけるかを感じさせたい。</p> <p>○ みゆきは、無視されながら真理子のことを真剣に考えていたことに気付かせる。</p> <p>○ 真理子とみゆき、恵子と由里たちは、いつも一緒であることは同じだが、その違いを感じさせる。</p>
ま と め	<p>3 事前に行ったアンケートの結果を聞く。</p>	<p>○ 教師の説話を聞き、自己の友人像を振り返ってみる。</p>	<p>○ 友情は信頼関係を育てあげることから深まることを理解させる。</p> <p>○ 小さな芽から、大きな樹に育てるイメージを伝える。</p>

⑥ 評価の観点

事前に友人についてのアンケートを行い、授業の発言や態度を観察し、授業を通して考えたことをノートに書かせるなどして変容をとらえる。

⑦ 研究協議会のまとめ

- 資料が長文のために、場面設定を明確にするため、一枚絵を提示するなど、展開の仕方を工夫した。
- 資料の内容が生徒に身近なものなので、その時自分ならどうするのか人物の立場になって考えさせるよう発問を工夫した。
- 友情は、互いの内面的な良さを根っ子にしながら樹木のように育て上げるものであることを理解させることが重要であると感じた。
- 生徒が真面目に一つ一つの課題に自分の考えを表現し、相手の考えも聞き、その上で自分の考えをさらにまとめながら取り組んでいた。
- 生徒の素直さ、授業の雰囲気良かった。
- 長文の資料なので指導過程では、2時間扱いとすればより深めることができる。
- 個人でより深く考えられる場面が欲しい。反対意見を取り入れていくと良い。

⑧ 授業の記録・生徒の感想（抜粋）※ T～教師 S～生徒

T 真理子は、みゆきを無視する。どうしてこんな行動をとったのか。

S 恵子と由里にいわれて、本人にその気はなかったが、断わるとその二人も逃げていくと感じて、乗っちゃった。

S みゆきの謝り方に誠意がなかった。流されているということもある。

S みゆきの日頃の行いが悪かった。

T みゆきに原因があるという事だが、無視されて誰だっていい気持ちはしない。誰からも相手にされない…。心にずしんと来る。そんな行動をとった真理子に対して、みゆきは真剣に向かっていき、どうしてありのままの気持ちを言おうとしたのか。

S 今までどおり仲良くしたい。

S 親友の真理子に無視されるのが嫌だから。

S 自分の気持ちを真剣に相手に伝えれば、相手もそれに答えてくれる。

T 無視されていた一週間、みゆきの心に真理子のことは、考えにあったのだろうか。

S 考えていた。(場面設定の絵を中心にあらすじを追い掛ける。)

T 真理子とみゆき、恵子と由里の関係は、これから先いったいどうなるのだろうか。

S 真理子とみゆきは、今まで以上に友情が深まる。

S 恵子は陰口を平気でいうから、友達はできない。

S 陰口をいうからみゆきのように無視される。

○ 親友という中にひびは入ったが、後の行動によってはより深い親友になれる。

○ 親友をなくしてはいけない、すごい大切な人物だと思った。



- 中学生だと、その人の良さが完全に分からないから、平気で悪口をずばずばという。
- 自分には、本当の意味の親友や友達がいるのか考えた。
- 無視するというのは、一番いやな事だと思った。

#### ⑨ 考察

「親友をなくしてはいけない、すごい大切な人物だと思った。」という生徒の感想から、中学生期の生徒にとって、あらためて、友人に対する心の占める割合は大きいものであることを実感した。そして、「無視されていた一週間、みゆきの心に真理子のことは、考えにあったのだろうか。」や「中学生だと、その人の良さが完全にまでは分からないから、平気で悪口をずばずばと言う。」という感想からは、日常生活の中で、生徒たちが様々な悩みを抱えていることも推察できる。そして「自分には、本当の意味の親友や友達がいるのか考えた。」や「真理子とみゆきは、今まで以上に友情が深まる。」や「親友という中にひびは入ったが、後の行動によってはより深い親友になれる。」などの感想からは、友人関係は友情の芽を育て上げていくことで、より大きな樹へと発達していくことに気付いた生徒たちの心情とともに、よりよい友人関係を築いていこうとする意識や態度が伺える。

また、発問は人物の行動面に視点を当て、行為の裏側にある気持ちや考え、及び、行動への構えを問うことを通して、ねらいとする意欲と態度を養おうとした。

他方、心情面の育成に視点を当て、たとえば、中心発問に

- ① 「『みゆきを無視しよう』という恵子の言葉を聞いたときの真理子の気持ちはどうだったのか。」
- ② 「みゆきの真剣な言葉に、逃げるように駆け出した真理子をどう思うか。」
- ③ 「恵子との会話で、みゆきのことを思い出したとき、真理子はなにを感じたのだろうか。」

というように、発問構成を工夫することも有効であると考えられる。

### 3 まとめ

第1分科会では、内容項目2-(3)「友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うようにする。」について研究を進めてきた。

人間は幼児期から遊びを通して他人と関わり、喜びや悲しみ、共感、闘争心などの様々な感情を経験し、やがては自我を確立し、主体的に社会生活を営むようになる。しかし、現在は、核家族化の進行にともなう一人っ子の増加、家庭における父親不在、受験競争の激化など、社会的存在としての人間的成長を軽視するかのよう状況も見られるようになった。このように子供たちを取り巻く環境は大きく変化している。それが生徒たちの友人関係に大きな影響をもたらすとしても不思議ではない。このような状況の中で健全な友人関係を育て、維持していくことは大変重要なことである。

中学生における友人に対する意識にどんな変化があるのかを知るためにアンケートを実施した。その結果、中学生の実態としては「友達がたくさんいる」と答えた生徒が多かった。その友達像は「一緒にいて楽しい」と答えた生徒がどの学年でも多かった。ただ、友達と親友の違いという質問には「何でも話せることや信頼し尊敬できる」という、信頼感に基づい



た関係が親友であるにとらえている生徒が圧倒的に多い。そこから、今の中学生の比較的希薄な友人関係の実態を読み取ることができる。しかし、本質的には誰もが、いい友達が欲しいと願い、いい友達になろうとする思いをもって生きていることもまた、事実である。今の中学生を取り巻く厳しい環境を考慮すると、希薄な友人関係の実態の裏側には、むしろ本質的な願いと思いが、それぞれの生徒に強くあるのではないかと、本分科会では考えた。

そこで、中学生に適した読み物資料を広く収集し、集めた十数偏の資料を検討した結果、文部省「道徳教育推進指導資料（指導の手引き）2」の「いつも一緒に」を選定した。資料の選定に当たっては、生徒の学校生活で経験しやすい場面設定がなされていて、生徒が自分の生活実態と重ね合わせて考えられることによって、ねらいとする価値に迫れるよう配慮した。

授業を構想するに当たっては、アンケート調査の結果にあった比較的希薄な友人関係と、その裏側にある本質的な思いをふくらませ「心から信頼できる友人をもつことの大切さ」を理解し、友情を育てていこうとする実践的な意欲と態度を養えるよう授業を構成した。

本研究で使用した資料は文章量が多いため、指導の手引きに示されている指導過程をとると、内容を理解させることに多くの時間を費やしてしまう心配があったので、資料を4つに区切るとともに、それぞれの発問に応じた場面絵を提示することにした。その結果、長い資料にもかかわらず生徒は、それぞれの発問に深く関わることができ、4つの区切りと場面絵は効果的であった。

また、登場人物が多いので「真理子とみゆき」の2人を中心に発問構成をしたため、授業を焦点化し、人物の気持ちを掘り下げ、ねらいとする価値に迫ることができた。

道徳の授業は生徒が発言し、そのことが深まっていけないと、ねらいとする価値に迫ることは難しい。生徒が自分の考えや思いを自由に表明するとともに、互いにそれを聴き合えるようにと考え、グループによる話し合いを取り入れた。生徒は自分の考えや意見、あるいは思いを自由に表明していた。ある生徒は「親友という中にひびが入ったが、後の行動によってはより深い親友になれる」という発言をした。人間関係が希薄であるとの実態ではあるが、つまづきを繰り返しながらも、その弱さや醜さを乗り越えてより良い友達を求め、より良く生きようとする中学生の真摯な姿を見ることができた。

当然ではあるが、友情について一人一人の生徒のとらえは異なっている。そのとらえを、道徳の時間を通して「親友をなくしてはいけない、すごい大切な人物だと思った」というように、その生徒なりに、友情に対する心情を深めたり、判断基準を高めたりしていけることが大切である。そのためにも、現在の生徒のとらえを大切にし、そこからより良い生き方ができるよう指導と評価を一体化していくことが大切であり、今後の課題の一つである。

もとより道徳の時間の指導だけで好ましい友達関係が築かれるわけではない。生徒が一日の大半を過ごす学校は、教科指導や特別活動などの教育活動全体を通して「友情の尊さを理解し心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うようにする。」ことが大切である。そのためにも、要となる道徳の時間を中心に教科指導や学級活動など他の教育活動との関連価値を明らかにした新たな指導計画と授業の構想をしていくことも課題である。

また、地域との連携を一層深め開かれた学校として、生徒たちがより良い友達関係を築いていけるよう、地域社会づくりの一翼を担っていかなければならないのも重要な課題である。

### Ⅲ 内容項目 1-(4) 「真理愛・理想の実現」についての指導（第2分科会）

#### 1 主題設定の理由

今日の科学技術の進歩と経済の発展は、物質的な豊かさと情報化社会を生み出すとともに、社会の各方面に様々な変化をもたらした。それは、一人一人に個性的で多様な生き方を可能にした反面、効率を優先する傾向は人間の生き方の指針や心のよりどころを見だしにくい状況をも生み出している。このことは中学生のものの見方や考え方にも大きな影響を及ぼしている。苦しいことや煩わしいことを嫌い、逃避や自己中心的な傾向も見られ、それらは現代社会の反映の一つともいえよう。

しかしながら、時としてこのような一面を見せる中学生であっても、心の奥底にはより良い生き方を願う気持ちが強くあることを見逃してはならない。とりわけ、誰もがもっている人間としての気高さや誇りとともに、道徳的価値を求め、弱さや醜さを克服して生きようとする心を奥底から浮かび上がらせる必要がある。その願いにこたえるため、人間としての生き方を自覚し、深めていく指導が極めて重要となってくるのである。

人は理想をもち、その実現のために日々精一杯生きることによって、明るく生き生きとした生活を送ることができる。そして、自己の理想が実現したときの充実した気持ちは何のものにも代え難いものである。しかし理想の実現は、何の障害もなく成し遂げられるものでなく、常にたゆまぬ努力が必要である。大きな困難に出会いくじけそうになるときもあるが、常に目標をもち、自己の理想実現のために生きようとする態度を育てることは極めて重要である。

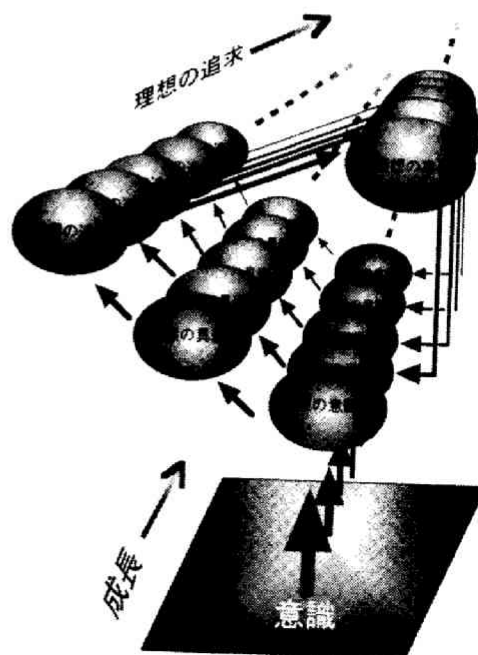
以上のことから、第2分科会では「人間としての生き方について自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道徳の時間の指導」として、内容項目 1-(4)「理想の実現」を取り上げ、内容項目のとらえ方、生徒の実態、資料の検討、指導方法等の研究を進めることにした。

#### 2 研究の内容と方法

##### (1) 内容項目 1-(4)のとらえ方

内容項目 1-(4)は、「真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り開いていくようにする。」（中学校学習指導要領道徳）である。この項目は、真理や真実を求めつつ、生きることについての目的や目標をもち、よりよく生きようとする積極的な態度を育てることにある。

中学生の時期は、理想を求める傾向が強まってくる。しかし、早急に理想やその実現を求め過ぎるあまり、現状認識が不十分のため途中で挫折したり、感覚的なものにひかれて理想を見誤ったりしがちである。そこで、理想に至るまでの過程である「真理を愛し、真実を求め」の部分に着目し、



〔図2〕真理愛・理想の実現のとらえ



これを中学生の日常生活の次元にもどし、その言葉に置き換えてとらえることにした。

「方程式が解けるようになりたい」とか「よい友達関係を築きたい」という願いは彼らにとって、まさに真理や真実の探求に他ならない。自ら考え、実現しようと内面から沸き上がり、意識された願いが目標である。このように身近に目標を見出し、達成しようと努力することが大切である。これがさらに高い目標を見出す力になり、それを達成しようとする勇気と自信を与え、よりよく生きようとする態度を培ってくれるからである。この積み重ねが次第に高いレベルでの真理や真実の探求につながり、理想の実現に結びつくことだろう。そこから、明るく希望をもって生きる態度が生まれてくるとともに、かけがえのない自分の生涯を豊かにすることができるのである。

以上述べたことを構造的に表してみるとページ14の図2のようになる。

## (2) 生徒の実態調査

### ①第一次調査の結果

将来つきたい職業を理想の一つとして考え、職業に視点を置いたアンケートを実施した。

対象地域・生徒…府中市 1年生 126名

#### 1回目のアンケート

〈設問〉 将来どんな職業につきたいですか。

〈目的〉 描いている将来の理想や具体的な目標について、どのような考えをもっているのか実態を把握する。

《回答》 スポーツ選手、教師、舞台・芸能、医者・獣医、設計技師など

〈考察〉 将来の職業について希望をもっているが、漠然とした将来象のために実現に向けてどのように具体化を図ってよいかはまだとらえきれていない。

職業を通した自分の理想とする将来像を描くことに、どの生徒も意欲を示した。しかし将来に向かって理想を実現するために、いろいろな条件を検討し具体的な目標を掲げるまでには至らなかった。そこで日常生活の中の目標を意識し、具現化することの積み重ねが理想の実現に結びつくと考え、身近な目標の達成という視点で再度アンケートを実施した。

### ②第二次調査の結果

#### 2回目のアンケート

〈目的〉 ①自分の生活をどのように見つめているか。(自己理解)・・・実態調査

②未来像・将来像をどのように考えているか。・・・・・・意識調査

対象地域・・・大田区、北区、練馬区、足立区、葛飾区、府中市、日野市、保谷市

対象生徒・・・1年生 210名 2年生 207名 3年生 207名 合計634名

#### アンケート項目(1)・(2)の考察

〈設問〉 (1) あなたは目標をもって毎日生活を送ろうとしていますか。

(2) どんな目標ですか。具体的に書いてください。

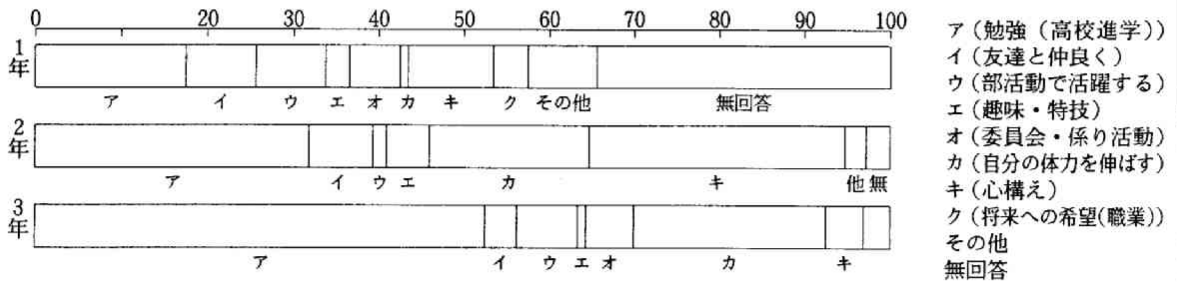
〈趣旨〉 ① 目標をもっているか。

② 目標達成のために努力することを意識しているか。

③ 自分の生活に即して理解しているか。

〈考察〉 目標をもち、それを意識して生活している生徒が多く全体の68.9パーセントいる。目標の内容は学校に関することが多い。「ア. 勉強（高校進学）」に関しては高学になるほど多く、「ウ. 部活動で活躍する」は低学年ほど多い。また「ク. 将来への希望（職業）」については高学年に多い。日常生活の実態に即して目標を定めていると考えられる。

設問(2)



アンケート項目3の考察

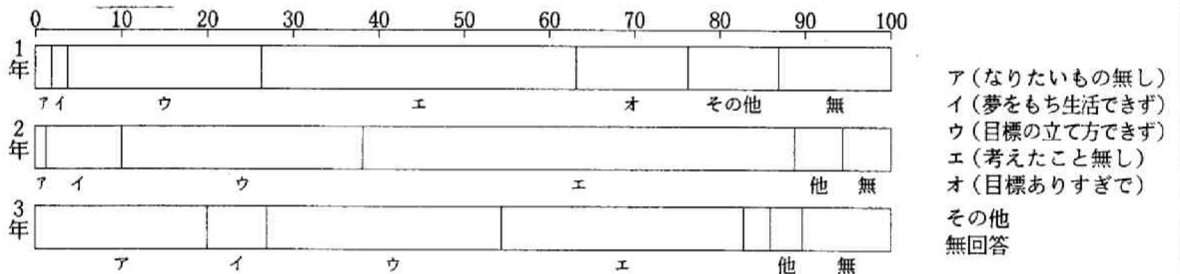
〈設問〉(3) 目標をもつのが、難しい理由を書ってください。

〈趣旨〉① 目標をもてない生徒の理由を把握する。

② 目標をもつことに気付いていない生徒の実態を把握する。

〈考察〉 「ウ. 立て方がわからない」からは具体的にどのようにしたらよいかかわからない。また「エ. 考えたことがない」からは受動的な生活を送っている様子が伺える。また、目標をもっていることに気付いていない生徒もいるようだ。

設問(3)



アンケート項目4・5の考察

〈設問〉(4) 目標を実現するための努力はしていますか。

(5) 努力することがなぜ難しいのか、書いてください。

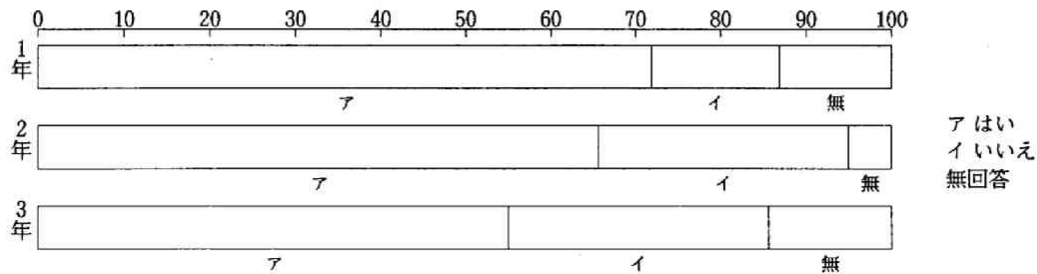
〈趣旨〉① 目標達成のための努力をしているか実態を把握する。

② 目標達成のための努力ができない阻害原因を把握する。

→生徒を取り巻く環境（外的要因）と生徒自身の問題（内的要因）の把握。

〈考察〉 目標達成の努力をしている生徒が多く全体の64.8パーセントいるが、反面努力できない理由は生徒の自己の内面的な問題が多い。目標をもてない生徒と努力できない生徒は重複して答えている者が多い。

設問(4)



〈まとめ〉 目標の内容は、学校生活に関するものが多く、特に3年生は卒業後の進路と関連が強い学習を目標にあげている生徒が多い。反対に1年生には学習を目標としている者は少なく、部活動などを第一にあげている生徒が多いとともに、自己の理想とする将来像に向け、具体的な今の目標を掲げている。生徒の大部分は、目標をもち達成のための努力をしている。しかし反面、目標をどのようにもてばいいかわからない、面倒くさいといった生徒もいる。また目標はもっているが、目標の具現化が図られておらず、その実現に向けて努力している姿は少なく、安易な妥協へと走る傾向がみられる。そこには将来に向かって理想が描ききれていなかったり、また描いても実現していくための諸条件を検討しきれていない生徒の実態が浮き彫りになった。

(3) 授業改善の視点

① 資料選定の観点・内容

第2分会では、内容項目1-(4)「理想の実現」の指導に用いる資料選定のための基本的観点として、中学校指導書道徳編（平成元年3月 文部省）ページ59に示された「自己の在り方を自分自身との関わりにおいてとらえ、望ましい自己形成を図ることに关するもの」という内容を踏まえるとともに、次の諸点に留意しつつ選定した。

(ア) 生徒の興味・関心に応ずる資料であること。

(イ) 生徒の自覚を深めるために役立つ資料であること。

(ウ) 生徒の実態に即したものであり、生徒が自らの生き方を考え、自己実現に目を向けさせることのできる資料であること。

(エ) ねらいとして設けられた道徳的価値を、極めて大切なものとして受け止め、その実現を図ろうとするような、深く結び付くことのできる資料であること。

以上の観点にたつて資料を収集し、検討した結果、朝日新聞のインタビュー記事であった「エラーで始まった投手人生」を選定した。

## ② 授業の構想

内容項目1-(4)は「主として自分自身に関すること」の中に示されている項目である。人間として生きることの真実と真理を求めることや、厳しく現実を見つめ、安易な妥協を排し、より高い目標を目指して、その実現に努力することは大切なことである。しかし、生徒の中には理想や夢を思い描くだけで、努力を惜しんだり、様々な現実と直面するたびに、安易な妥協や挫折から人生の空しさを感じてしまう様子も見られる。

そこで、無気力、無目的と言われる現在の生徒に、自らの人生に視点を当て、改めて自分の生き方を見直し、自己の人生を切り開いていこうとする意欲を育てるような授業を展開していくことが重要であると考え、同資料による指導方法と指導の工夫を変えた2回の授業を構想した。

第1回目は事前の指導として、進路指導と関連をもたせた授業として構想した。第2回目は第1回目の授業を受けて、本項目の指導内容の充実を図るために授業を実施した。

生徒の実態を把握するために実態調査を再度実施し、その分析結果をもとに資料活用の改善、工夫を行った。授業を展開するに当たり、身近な問題としてとらえるために、日常生活の中で目標をもつことについて考えさせた。また、生徒一人一人が目標を実現するためにどのようにしたらよいか、またはどのように生活していけばよいかを考えさせた。さらに、小集団による話し合いを行い、他者の意見を聴き合える場を設けた。

## ③ 指導方法と指導の工夫

中学校学習指導要領第3章道徳の「第3指導計画の作成と内容の取り扱い」に、「すべての内容項目が人間としての生き方についての自覚とかかわるように留意」して指導することが求められていることから、人間らしく生きようとする意欲を高める指導の工夫が、良い授業をつくるための重要な視点となるはずである。つまり自分自身の問題として受け止めるように指導することによって、生徒に、自らの生きる姿勢が形作られていけば、人間として生きることに深い喜びがあることが分かり、自己実現への展望が開けてくるのである。そうすることで学習にもスポーツにも、ねらいを明確にし、発問も十分に吟味したものにすると考えた。

### (ア) 導入における工夫

【第1回目】生徒自身が書いた作文をもとにし、各自の「理想(夢)」を確認しながら、その実現へ向けての努力を述べさせた。また、資料に興味をもたせ、内容をより深く理解できるよう、山田久志投手について知っていることを生徒に発表させた。

【第2回目】日常生活の中で、生徒自身が継続して努力していることを発表させた。

### (イ) 展開における工夫

【第1回目】資料の読み取りでは、山田投手の生き方について考え、そのひたむきな生き方に対して共感できるよう発問を工夫した。生徒が自由に意見交換できるように小集

団による話し合いを取り入れ、互いの意見を尊重し合い、自分とは異なる考え方を認めながら、道徳的な価値を学び合えるように進めた。

また、発問については「資料と比較して、自分はこうしたらよいか」という意味の問いかけや、「生き方をどう考えるか」というような問いかけを除き、山田投手を自分に置き換えられるように発問を工夫した。

【第2回目】山田投手の立場になって考えさせ、また監督の気持ちについても考えさせた。生徒の意見や考えをより多く引き出させ、前回同様他人の意見を尊重し、さらに自分の考えを深めることができるように配慮した。また、より山田投手の立場に近付くため、図3のワークシートを使用した。

(ウ) 終末

【第1回目】資料充実のため、同じ目標(野球)、夢を実現した他の選手の手記を読ませた後、自分自身の生き方について考え「自己を磨く」という作文にまとめさせ後日作文を掲示した。

【第2回目】資料についての考えや意見を出し合った後、再度自分の身近な目標について考え、努力するにはどうすればよいかについてまとめさせ、今後の生活に生かせる考えを整理し感想を書かせた。

(エ) 評価の工夫

【第1回目、第2回目共通】

- 生徒が発言などを通して、意欲的に授業に参加していたか。
- 資料中の登場人物、または友達の考え方と自分の考え方を比較していたか。
- 日常生活にかかわる道徳性について、一層の深まりを自覚したか。

以上の観点を授業態度や終末の作文により評価することとした。

④ 資料の内容

本資料は、甲子園大会出場がかかった大切な試合で、自分のエラーでサヨナラ負けをしたということで、この苦い経験をバネとして、その後20年間284勝もする球界を代表する投手になった山田久志氏の新聞インタビュー記事の抜粋である。

名投手として大成するための道程は、決して平坦でなく、様々な障害や困難、失敗も数多くあったに違いない。インタビュー記事ではあるが、山田氏のひたむきな生き方が伺える。現代の中学生が、理想を追求し自己の生き方を見つめ、考えることができるであろう。

(4) 実践事例(第1学年)

- ① 主題名 理想の実現(自己の人生を切り開く 内容項目1-(4))

道徳授業の記録

年 組 番 氏名

1、山田投手が野球をやめようと思ったことについて考え、書いてみよう。

---


---

---

---

---

---



2、「じょあ山田、今度はお前がピッチャーやってみる。」

---

---

---

---

---

---

3、「自分を磨く」にはどうすれば良いか書いてみよう。

---

---

---

---

---

---

② 資料名 「エラーで始まった投手人生」(暁教育図書)

③ 主題設定の理由

中学生の時期には、自分の将来に向かって理想を求める傾向が強くなっていくが、それは必ずしも十分な現状の認識に基づいている訳ではない。夢を求めることだけを考え、時には自分を過大に評価するために失敗し、挫折したりすることもある。そこで自己を見つめ、理想に向かって着実に努力しようとする意欲をもった態度を育てたい。

④ ねらい

自分の将来に向かって、高い目標をもち、自己の人生を切り開くため、よりよく生きようとする意欲を育てる。


⑤ 指導過程

○実践事例第1回目

	学習活動・発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	1 自分の将来の目標について発言させ、その目標達成のために、どんなことをしているかを述べる。	○サッカーが上手になりたい。 ○平凡なサラリーマンになりたい。 ○保育さんになりたい。 ○看護婦になりたい。	○ 目標は、具体的なものとさせる。 ○ 友達の夢について知る。 ○ 山田投手の経歴について説明する。
展開	2 資料を読む。 3 山田投手が野球をやめようと思ったことについて話し合う。  ①「ショックで涙も出ない」という時の彼の気持ちをどう思うか。  ②野球をやめることを伝えたとき、「そうか・・・」と言った監督はどんな気持ちだったろうか。  ③引き留めてもらえなかった山田投手の気持ちはどうだったのだろう。  ④「おれの生き方って、割といいなあ」という山田投手の生き方は、どんな生き方か。	○ みんなに申し訳ない。 ○ 分かる気がする。 ○ 自分のエラーで勝ちを逃したのだから、仕方がない。 ○ 野球には、向いていないんじゃないか。  ○ 山田が責任を取るのは当然だ。 ○ 力があるのい惜しいなあ。 ○ やめるなんて、意気地がない。  ○ 予想外だった。 ○ 相談に乗ってくれると思ったのに。  ○ 黙々と努力する。 ○ 夢を捨てない。 ○ 逃げない。 ○ 純粹だ。	○ 理想を求める時は常にうまくいくとは限らず、困難にぶつかると挫けそうになるということに気付かせる。  ○ 挫折したときには他の人の励みだけでなく、時には強い言葉や態度も必要であることを気付かせる。  ○ 自らの目標に向かうためには、自分の努力する気持ちが大切であり、理想を追求した時の満足感を感じ取らせたい。
終末	4 参考資料を読む。 (数年前の野茂投手の新聞記事) 5 「自分を追っかけて欲しい。自分を磨いて欲しい。」という山田投手の言葉を自分にあてはめ、「自分を磨く」にはどうすれば良いかを考え作文に書く。		○ 身近な野茂選手記事で、内容をより深める。 ○ 自分の目標と合わせて、考えさせる。



○実践事例第2回目

	学習活動・発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導 入	1 自分の生活の中で、毎日あるいは毎週、続けてやっていることを述べる。	○ 部活動の練習を頑張っている。 ○ 家の手伝いをしている。	○ 友達の述べたことについて考える。 ○ 山田投手の話をして、資料に対する理解を深める。
展 開	2 資料を読む。 3 山田投手が野球をやめようと思ったことについて考える。  ①「ショックで涙も出ない」という時の彼の気持ちをどう思うか。  ②「じゃあ山田、今度はお前がピッチャーやってみろ。」と言われた時の気持ちはどうだったか。  ④「おれの生き方って、割といいなあ」という山田投手の生き方は、どんな生き方か。	○ 責任を取るべきだ。 ○ 根性がない。  ○ みんなに申し訳ない。 ○ 分かる気がする。 ○ 自分のエラーで勝ちを逃したのだから、仕方がない。 ○ 野球には、向いていないんじゃないか。  ○ 好きな野球をやめるのは、残念だ。 ○ 前の反省を生かし、今度は頑張るべきだ。	○ 理想を求める時は常にうまくいくとは限らず、困難にぶつかると挫折そうになるということに気付かせる。  ○ 挫折したときには他の人の励ましだけでなく、時には強い言葉や態度も必要であることを気付かせる。 ○ 自らの目標に向かうためには、自分の努力する気持ちが大切であり、理想を追求した時の満足感を感じ取らせたい。
終 末	4 「自分を追っかけて欲しい。自分を磨いて欲しい。」という山田投手の言葉を自分にあてはめ、「自分を磨く」にはどうすれば良いかを考え作文に書く。		○ 自分の目標と合わせて、考えさせる。

⑥ 評価の工夫

本時の評価の観点として、「どのような目標をもって生活していこうとしているか。また、それを実現するにはどうしたらよいか。」として設定した。そこで、評価の一方法として本時の終末で、感想を書かせることによって、観点に対する到達度の分析を試みた。

さらに、生徒の日常生活の様子や、授業中のすべての表現活動等を総合的に検討し、生徒の心の変容に目を向け、一人一人の良さを見付ける。

⑦ 授業記録

【第1回目の記録】事前のアンケート——将来つきたい職業——をもとに、生徒たちの将来の夢とその理由を発表させ、導入とした。これが生徒たちの反応の良さ、発言のしやすさにつながった。誰もが自分の意見を素直に発表できることは、学級が受容的雰囲気込まれているからであり、日頃の学級経営、道徳指導の充実ぶりが伺えた。

しかし、この導入が夢や理想というものを将来つきたい職業と限定した印象を生徒に与えてしまった。そのため、資料の内容を、希望する職業につくには大変な努力と強い意志が必要だ、ととらえていた。筆者の生き方に関する発問に対しても「波乱万丈の人生」と

か「無理した生き方」という努力に視点が置かれた意見が多かった。

【第2回目の記録】前回の反省と内容項目のとらえ方の検討を受け、日常生活で目標にしていること、努力していることを発表させ、導入とした。また、発問の数も一つ減らし、中心発問での意見交換の時間の確保に努めた。

指導者が副担任であったため、最初は発言がほとんどなく、指名されても下を向いて黙っている生徒が多かった。しかし、グループでの話し合いに変えた途端状況が一変し、意見の交換が活発になり、互いの感じ方や考え方の異同に気付き、交流する場面も多く見られるようになった。そして、発問「おれの生き方って・・・」に対して「夢をもった生き方」というねらいに沿った意見が発表されるまでに考えが深まっていった。

後半は、さらに教室の雰囲気が変わり、理想を追求するときの満足感を感じとる様子が伺えた。終末では、すべての生徒が教師の目を見て、真剣に話を聞いていた。

#### ⑧ 考察

山田投手の立場を自分に置き換えて感じたり考えたりできるよう発問を工夫したことで、どちらの授業も発言が活発で、互いの感じ方や考え方の交流がよくでき、より良い生き方をしたいという生徒たちの切実な願いが溢れる授業になった。しかし、導入が教師の意図とは異なる先入観を与えてしまったり、内容項目のとらえ方が生徒の日常生活に即していないと、ねらいを達成することが難しいと分かった。これは、生徒たちの内面の具体的な様子を知らず、抽象的な道徳的価値について考え、話し合うことで、ねらいに迫ろうとしたところに原因がある。

生徒たちはより良い生き方を切実に願っている。そのため教師は生徒理解を深め、指導しようとする価値を生徒の生活に置き換えて読み込み、これがどのように生徒の心と結び付くかという筋道に着目した指導案を構想するとともに授業方法を工夫して、指導しなければならないと痛感した。

#### ⑨ 研究協議会のまとめ

「これからの道徳教育と道徳の授業」(東京都教育庁指導部)『道徳の時間の指導の工夫』における次の3点に基づき、研究協議会を行った。

- (ア) 生徒一人一人が自分なりの感じ方や考え方をもち表現することができる。
  - (イ) 生徒一人一人がお互いの感じ方や考え方の異動に気付き、交流することができる。
  - (ウ) 生徒一人一人が気付いた道徳的価値に照らして自分を振り返り、生き方の指針をつかむことができる。
- (ア)、(イ)において、班単位のグループでの話し合いを取り入れたことでは、自分の意見を出し合い、他の意見を聞くという点で効果的であった。また、導入部での全体への発問や各グループの発表に対する意見交換が、自由で自然な発想からできた。生徒間、生徒と教師間の言葉のキャッチボールの姿が多く、生徒と教師が共に語り合う道徳の授業の実践がみられた。
- (ウ)においては、授業実践ではっきりととらえることは難しい。授業後の作文やその評価を後の教育活動にどう結び付けるかが課題との意見があった。また、生徒の意見の板書計画を工夫し、授業の流れが明確に分かるようにとの指摘もあった。



全体的に、生徒の素直で活気ある意見交換、変容には、生徒間、生徒と教師間との信頼関係と日々の教育活動の実践に裏打ちされたものがあるかどうかによって決まるとする意見が多くあった。資料の読み込みや内容項目のとらえ方の重要性の指摘も多くあった。

### 3 まとめ

第2分科会では、内容項目1-4「真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り開いていくようにする。」について研究を進めてきた。

人は、より良い人生を送りたいと願い、自らの生涯をかけるに足る悔いのない人生の実現を願っている。そして、日々の生活を充実したものにするために、生きることについての目的や目標をもち、自分の理想の実現に向かって努力しようとする。しかし、現実には、精神的なことよりも物質的なことに価値観を置き、その日が楽しく過ごせればいいという風潮が多く見られる。自己の人生を見通し、よりよい人生を送ろうとする努力に価値を見出すことが軽視されているともいえる。

中学生の現実を見ても、必ずしも自分の置かれている現実を十分認識していない。自己中心的な考えでまわりが見えなかったり、反対に周囲の現実にああしたり、集団に影響されて主体性を失ったり、時には、人生に絶望したりしがちである。そのような生徒の実態をとらえるために、アンケート調査を行った。

調査を考察してみると、現代の中学生は、低学年では、将来の目標を漠然と思い描いている生徒が多いが、目標の具現化が図られておらず、その実現に向けて努力している姿は少ない。高学年になると、受験の影響から、どういう高校に進学するかという、身近な目標が変わるという実態がわかった。そこには、自らの人生を考え、生きることについての目的や目標をもち、より良く生きようという積極的な態度が十分に芽ばえていないという状況が見られた。

このような調査結果を踏まえて適切な資料を選定するよう努めることにした。生徒が生き生きと授業に取り組むためには、生徒の求める課題や、心の問題について、適切にこたえる資料でなければならない。資料の選定に当たっては、自己の夢に向かって、現実にああせず、日々努力していくものを取り上げることにした。より良く生きようとする道徳的実践力を身に付けさせるために、指導方法の工夫・改善を実践的な授業を通して深める研究を進めた。同じ資料を用いて、二度の研究授業を行い、導入の工夫や発問構成を吟味するとともに、発問に対する生徒の反応を見ながら、授業改善を図った。ねらいとする価値に対する生徒の意識の実態をとらえて、理解した上で、指導過程や発問構成を工夫・改善し、活発な学習活動が展開される場となるような道徳の授業を進める必要性を強く感じた。

将来の自分の理想を実現するためには、日々の生活の中での身近な目標を見つけて実現し、それを積み重ねることによって、やがて真理を愛し、真実を求める、遠大な夢や理想に近づくことができる。そのためには、まず身近なものに価値を見だし、努力する心を育てることが大切であると考え。さらに、理想の実現のためには、自己を見つめるとともに、他者を認め、おもいやる心をもち、よりよい人間関係を築いていくことも必要である。そのことが、理想の実現を目指して自己の人生を切り開いていくことにつながるものと考え。

#### IV まとめと今後の課題

現代社会は今後ともさらに複雑化、多様化の方向に進んでいくであろう。そのなかにあって、次代を担う生徒が豊かな心を持ち、たくましく生きていくためには、心の教育の充実が必要となる。その中心となる道德教育の責任は重い。今回「人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道德の時間の指導」を研究主題として掲げたのは、その要請にいくらかでもこたえようとしたためである。

本年度は、第1分科会が内容項目2-(3)「友情・信頼」を、第2分科会が内容項目1-(4)「真理愛・理想の実現」を取り上げた。そして、それぞれ研究主題の明確化に努め、道德の時間の充実をめざして研究を進めてきた。具体的には、ねらいとする価値の内容を分析、整理するとともに、資料の収集および選定と活用の工夫を行った。また、アンケート調査などを通して生徒の意識の実態の把握に努め、授業研究を通して生徒の実態に即した授業の在り方について研究を進めた。

第1分科会では、「友情」は育つもの、育てるものとしてとらえた。「友情」はお互いの内面的な良さを土壌とし、信頼と敬愛という養分を注ぐことにより育ち、お互いの人間的な成長に結びつくものと考えた。第2分科会では「理想の実現」とは日常の自分の目標の意識化から出発し、目標の具現化、具体化を通して目標を達成し、それがさらに高まり「理想の実現」へとなっていくものと考えた。両分科会では、内容項目のとらえ方について、深く検討し、結果を構造図として表した。実態調査は各研究員の所属校でアンケート調査を実施し、その集計結果に考察を加え、各学年での指導のねらいとしてまとめると同時に、授業研究に役立てた。

次に、「資料選定の観点・内容」「授業の構想」「指導方法指導の工夫」「評価」などの各項目に対して授業改善の視点を定め、研究授業にのぞんだ。特に第2分科会では第1回の研究授業の後、生徒の実態調査と、授業の成果と課題を踏まえて、第2回の研究授業を実施し、授業研究の深まりを明らかにした。

研究授業を通して、多くの生徒が自分の生き方についての疑問や悩みをもっていること、そして、それを語りたいという欲求をもっていることがわかった。道德の時間の指導方法を練り上げ、効果的な展開を工夫することによって、そのような生徒の真摯な欲求を引き出し、高めることができることに改めて気付いた。

今後の課題として、もとより道德教育は学校の全教育活動を通して行われるものである、他の教科、領域との関連について、さらに考察を加えていく必要を感じる。また道德教育を推進する校内の組織、計画について、示唆に富む意見が出されたが、これもさらに研究の必要を感じる。また、学校・家庭・地域社会の連携を図った道德教育の推進についても、今後の課題としたい。

生徒は未来からの留学生といわれる。この留学生の本質的な願いや思いにこたえる道德教育が求められている。教師は現在を的確にとらえ、未来についての想像を豊かにして、生徒の心の教育に当たらなければならない。「人間としての生き方の自覚を深め、主体的に生きる力を育てる道德の時間の指導」は、さらに強力に推し進める必要があり、私たち研究員一人一人はその決意でいる。